

---

# 蒼眼の契約

宵音律葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼眼の契約

### 【Zコード】

N4425Y

### 【作者名】

宵音律葉

### 【あらすじ】

これは一人の式神師と、契約を結んだ式神・・・そして、主と呼  
ばれる者とその式神との関係を描いた和風ファンタジー小説です。<sup>アルジ</sup>

「冥鬼の影 閻夜の少女」一刻（前書き）

萩たちはある依頼人から仕事を頼まれた。それはいつもながらの仕事だったのだが…

（冥鬼の影 閻夜の少女）一刻

すべての始まり……この一言だった。

「すまない……相模……一族を断たせないためにもこうするしかなかつたんだ。  
本当にすまない」

\* \* \*

……まだ、日の光が見え始めた頃。

一人の少年の声が響き渡った。

「蒼全！ そっちにいったよーー！」

冥鬼を追う、紫苑色の少長髪に紫の瞳を持つ少年。  
名を緋ノ原（ヒノハラ）萩（ハギ）といふ。

緋ノ原家一族の式神師であり、現当主である。齡、十五。

「 ああ！」

また同じく、冥鬼を追う、藍色の長髪に蒼色の瞳を持つ青年。  
名を蒼全といつ。

萩と契約を結んだ式神。外見では齡、十七。

…事の発端は昨日。

「 はい…」

萩たちは仕事の依頼を受けていた。

依頼者は槍羅幸成さん。外見は二十代後半。呉服屋の若旦那でおられる。

話では槍羅さんの娘さんが毎晩寝ている時、屋敷の庭の方で不気味な声を聞くという。

大抵このような奇妙な事には、冥鬼が関係している。

冥鬼とはこの世で「悪しきもの」。幽靈、怨靈、物ノ怪といった類のものをいう。

冥鬼は式神師や冥魂を持つ人間以外には声は聞こえても姿、形は見えない。

「 わかりました。では後程、そちらへ伺わせていただきます  
「 ありがとうございます。では」

依頼者は一礼をし、部屋から出ていった。そのあとを女性が追いかけ、玄関へと案内した。

数分後、玄関へと案内しに行っていた女性が部屋へと戻ってきた。  
薄桃色の長髪をポニー テールしており、紅梅色の瞳を持つ彼女。  
名を東雲という。

彼女もまた、萩と契約を結んだ式神であり、外見では蒼全と同じ、  
齢 十七。

部屋へと入ってきた東雲に萩は「 ありがとうございます。東雲」と一言いつた。  
その言葉を聞き、東雲は彼に微笑んだ。

一緒に依頼の話を聞いていた蒼全が口を開いた。

「 萩、さつきの話しからして」

「 …うん。その冥鬼はたぶん、冥魂を狙っているんだと思つ

〔冥魂〕  
〔冥魂〕とは、ある特定の人間の中に存在する特別な力の塊である。  
冥魂を持つ人間は普段は冥魂の放つ結界で守られており、冥鬼たち  
は近づく事ができない。

冥鬼たちの中にも、人間に危害を加えないものと、冥魂を我がもの  
にするために人間に危害を加えようとするものがいる。

これもとに代々生まれた時から冥魂を持ち、冥鬼を近寄らせ、祓  
い清める者を式神師といつ。

\* \* \*

：依頼を受けてからどのくらいの時間が過ぎただろうか。  
仕事の準備はできたところで

「じゃあ、そろそろ行こうか」  
「…そうだな」

二人が玄関へ行くと東雲が待っていた。

「一人とも、仕事がんばってね！」

「うん」  
「ああ」

東雲の見送りの中、一人は依頼者の家へと向かった。  
外では日が西の方へと沈もうとしていた・・・。

\* \* \*

少し時間が経ち、萩たちは依頼者の屋敷へと着いた。

門の所では、依頼者の槍羅さんが待っていた。

「萩様、お待ちしておりました。…」さうです」

萩たちは庭へと案内された。するとすぐに一人は何かを感じた。

「…まだ、冥鬼の気配が残っているみたいだね」  
「ああ。それも少しつてもんじやないな」  
「だね。…じゃあまず、結界を張りつけ。中へ入らせなにようにしないと」

萩はブツブツと何かを呟え始めた。

すると、辺り一面、何かスウ つと不思議な感じのする空氣に包まれた。

依頼者の槍羅さんもそれには気付いた。

「…」  
「…」  
「結界です。結界内では冥鬼の気配も清められるので空氣が澄んでぐるんです。  
槍羅さんにはこの結界がお見えで？」

「いえ。見えるのではないのですが、何かスウ つと肌に触れる感じがしまして…」

その時。

「わあ……！」

後ろで声がし、萩たちは振り返った。その先には障子から小さな女の子が顔を出していた。

彼女も同様、結界に驚いていた。

槍羅さんは少々、慌てた様子で女の子の傍に行き

「すみません。申し遅れました。娘の楓です」  
「は、初めまして……。槍羅楓です」

楓は少し恥ずかしそうにしていた。

萩は楓の傍に行き

「初めまして。式神師の緋ノ原 萩です」

萩は楓に微笑んだ。

「もう大丈夫ですよ。あの声のものは結界を張つたので、屋敷内には入つてこれません」

「ほ、本当に……よかつたあ」

楓は安心した様子だった。

「……しかし、名を聞かれても決して、答えてはいけません。

何も言わずにただ、じっと、声のものがいなくなるのを待つのです」

その言葉を聞き、楓は頷いた。

冥鬼は冥魂を持つ人間に名を尋ねてくる。

もし、それに答えれば冥魂の放つ結界が弱まり、冥鬼は人間に触れることが可能となる。

そして体内の冥魂を抉り取る。

抉り取られた人間は死ぬ。

冥魂はいわば、第二の心臓のようなものだ。

\* \* \*

……完全に夜が更けた頃。

何処からか不気味な声が聞こえてきた。

「名ヲ、名ヲオシエロ…オマエノ名ハ…ナンダ…ナンダ…」

萩たちは声のする方に目をやると、そこには壙の上で鋭い目つきで

こちらを見る冥鬼の姿があつた。

しかし萩たちに気付いたのか、逃げ出して行つてしまつた。

「…僕たちに気付いたみたいだね。

槍羅さん、僕たちが戻るまで絶対にこの中からは出ないでください！」

「は、はい。わかりました…」

「行こう！ 蒼全！！」

「ああ！」

二人は塙を飛び越え、逃げ出した冥鬼を追つていった。

\*\*\*

…これから先が最初の現状にあたる。

「はあアアア！！」

蒼全は水龍を呼び起こし、冥鬼めがけて放つた。  
しかし、冥鬼から避けられてしまつた。

「 チツ 、 ちよこまかと動きが速い 逃がすか！！」

蒼全は再び水龍で挟み撃ちをし、冥鬼を捕らえた。  
冥鬼は逃げようとしたが、水龍が身体に巻き付き、身動きがとれな  
いでいた。

「 萩、 今だ！！」

萩は言靈を唱え始めた。

〔トドマ〕  
言靈とは、式神師が冥鬼を祓う際に使う清めの言葉のようなもの。  
式神師は言靈に冥鬼たちの穢れを祓うための「願い詞」を込める。

「 欲は岩の 』とく崩れ落ち、穢れは風と共に去りゆく時、縛られ  
し魂を今、解き放て！」

萩は札を取り出し、冥鬼へと投げつけた。

すると、冥鬼の姿はボウフ と消え、その後白き灯し火となり、ス  
ウ つと天へと昇つていった。

「 …ふー 、 依頼完了了！」

「 ああ。終わったな」

「 うん。じゃあそろそろ、槍羅さんの屋敷へと戻ろうか？」

蒼全

その時。

「あ～あ。なにあたしの冥鬼祓つてんのセー」

「…？」

萩と蒼全はバツ一と声のする方に目を向けた。

そこには薄茶色のくせのある髪を赤紐でツインテールにしており、褐色の瞳を持つ少女。

齡、十ぐらいの少女が築地の上で足を組み、座った状態でじりりを見ていた。

「なにあたしの邪魔してんのセ。式神師」

「君は…？」

「なにさ。あたしの名は刹那<sup>セイナ</sup>。我らの主<sup>アルジ</sup>の覚醒のため、冥魂を

頂いてるだけや」

「主<sup>アルジ</sup>つて…君らの主？ それに覚醒つて…！」

「あんたらには関係ないよ。邪魔しないでくんない？」

刹那はツンとした態度で後ろを振り返った。

「えッ！ あつ、ちよつ…？」

その瞬間、刹那はスッと暗闇の中に姿を消していった。

「 … 」

萩と蒼全、二人のなかで沈黙が続いた。

…だが、最初に萩が口を開いた。

「 あの子は一体 」  
「『『我が主の覚醒』とか言っていたな…』」

蒼全も口を開いた。

「 … もしかしたら今、何かが起ころうとしてるのかも知れない。  
… だけど今は、槍羅さんの屋敷に戻る事が先決だ。戻ろう、蒼全… 」

「 そうだな 」

二人はその場を後にした。

\* \* \*

その後。

家へと帰った萩と蒼全は平穏な一日を過ごしていた。

「ふあ～…」

萩は眠そうにあぐびをした。

「萩くん、なんだか眠そうだね」

お茶を運んできた東雲が萩の前に湯呑を置く。

「うん 昨日の夜もずっと動きっぱなしだったからや～」

萩は東雲が注いでくれたお茶を飲みながら一息つく。

「萩、少し休んだりどうだ？」

蒼全もお茶を飲みながら言った。

「… ん～…じゃあ、ちょっと一休みしようつかな。  
あ、東雲。お茶ありがと～」

萩は優しく微笑み、自分の部屋へと向かった。

部屋に戻る萩を心配そうに見ていた東雲が口を開いた。

「萩くん。少し疲れているみたいだね…」  
「ここ最近、依頼が詰まつてたからな」  
「この頃忙しいよね…。蒼全も休まなくて大丈夫?」  
「ああ。俺は平氣だ」  
「そう。じゃあ、お茶入れてこようか?」  
「悪いな、東雲」  
「ふふつ。いいよ」

東雲は微笑み、お茶を注ぎにいった。

蒼全はふと、空を見上げた。

空では、日がちょうど真南に昇り、少し肌寒い風が吹いていた。

\* \* \*

萩は夢を見ていた。

「…しか かつた…」

( …これは…僕がたまに見る夢だ )

「あの時は…するしかなかつ」

( 見るたび、いつもあまりよく聞き取れないな。 )

（ 脣にしか見えないけど、あれは…父上と…母上……？ ）

「本当にすまなかつた…」

( 誰かに謝つてゐる…。あれは…誰だらつ？ )

そこには、地にまで届く白銀の長髪の青年らしき姿があった。

( …やつぱり、顔がよく見えないけど、僕の知っている誰かに似てる。あれは… )

\* \* \*

「 も… はも… 萩 …！」

「 …！」

萩は目が覚め、ガバッと身体を起こした。

「 萩、どうした！？ 軽くうなされていたぞ」

横に目をやると、蒼全が心配そうに萩の傍にいた。

…その後、萩はハア…と息をもらし、布団へとゆっくり倒れた。  
そして、額に手を翳しながら一言。

「 父上たちの夢を見たんだ」

「 …あの夢か！？」

「 うん…」

「 今度はどうだった！？」

「 ううと、駄目だった。やっぱり顔が見えない」

「 …そうか」

「 だけど、見るたび、あの姿を思い出しそうなんだ。誰かに似てる 僕の知っている誰かに。」

そしてたぶん、父上が謝っていた人が父上たちや 皆が殺された事について、何か知っていると思つんだ」

「 ……途中で起こしてすまない」

蒼全は途中で起こしてしまった事を悔やんでいた。

「 !? 蒼全のせいなんかじゃないよ! 僕もほら、夢が覚めそ  
うだつたんだし」

萩は少し驚いたが、蒼全に優しく声をかけ、微笑んだ。

「 そういえば、東雲は?」

ふと東雲のことを思つた。

「 東雲は少し外に出ている。夕飯の材料を買いにだとか。  
それと、言い忘れていたが…今、優利たちが来ているぞ

「 えつー?」

…その時、後ろの襖が開き、声がした。

「 ちよつと入つてもいいかな? 」

そこには、若葉色の瞳に細長い眼鏡をかけており、深緑の長髪で、肩のところで横に結っている少年が立っていた。。

名を桐沢 キリサワ 優利 スケリ という。

彼もまた、緋ノ原家 同様、桐沢家一族の式神師であり、現当主である。

萩 同様、齡、十五。

「 あつ、『ごめん!!』 起こしたかな? 」

慌てた様子の彼。

「 うつん。僕も今起きたところなんだ」  
「 あ、そうだったんだ…。よかつた」

優利は安堵のため息をついた。

「 ! そういえば、ここに来る途中、萩の好きな羊羹ヨウカン を買つてき

almondで食べべまつと思つてさ

「 本当! 」

嬉しそうに、声のトーンが上がる。

「うん。だからさ、向こうの座敷で食べよつ。蒼全も一緒に」  
「すまないな」  
「ありがとう。優利」

蒼全と萩は優利に礼を言つた後、座敷へと向かつた。

座敷では、一人の姿があつた。

唐紅色の短髪に深紅の瞳を持つ青年。

名を蘇芳スオウといつ。

優利と契約を結んだ式神。  
外見は他の式神同様、齡、十七。

「蘇芳、久しぶり」  
「ああ。久しぶりだな」

萩は蘇芳と挨拶を交わした後、周りを見渡しながら優利に話しかけた。

「……あれ？ 今日は三人じゃないの？ 時雨さんは？」

「今日は用事があつて一緒に来てないんだ。  
朝、母上から文が届いて、時雨に手伝つてほしこつて書かれてて。  
それで今は、本家の屋敷の方に行つてるんだ」

時雨は優利と契約を結んだ式神だ。シグレ

「ふーん… そななだ」

「うん。 そういうば、東雲さんの方は？ 今日は姿が見えない  
ようだけど」

「なんだか今、夕飯の買い出しでちょっと出でるみたい。 ねえ  
？」

「ああ。 それで俺が萩の傍にいる代わりに、留守番を任せられたん  
だ」

「…へえ」

納得したような様子の優利。

その時、ガラツと玄関先で音がし、東雲が帰ってきた。

東雲は座敷の襖を開いた。

「ただいま～」

「おかえり。 東雲」

萩が笑顔で出迎えた。

「おかえりなさい。 東雲さん」

優利も笑顔で出迎えた。

「あつ！！ 優利様！ 蘇芳！ お久しぶりです」

とても驚いた様子。

「 “ひしおり…。優利様たちがこいつしゃぬとは知りず、茶菓子を買つてこなかつたよ」

少し焦る彼女。

「 あ、お氣になさりす。ここに来る途中、羊羹を買つてきたんです。東雲さんもどうぞ」

優利は羊羹を見せた。

「 い、いいんですか！？ ありがとうございます！」  
えつと、じゃあお茶を次いできますね」

東雲は急いでお茶をいれに行つた。

その後、皆は楽しい一時を過げした。

\*\*\*

： その夜

萩は一人、縁側で月を見ていた。

「 今日は満月かー…」

夜空に輝く月が、辺りの闇を照らしていた。

「 そういうば、兄上もいつも月を見るの好きだつたなー…」

萩は一年前に亡くなつた兄の事を思い出した。  
兄、緋ノ原 ヒノハラ 相模 サガミ は萩の二つ上で、一年前に病氣のために亡くなつた。

「 兄上…」

萩は月を見ながら呟いた。

すると

「 萩は本当に月を見るの好きだな」

「……」

萩は振り返った。

そこには蒼全がいた。

「えらい驚きよつだな」

蒼全が驚いた様子で隣に座った。

「ハハツ「めん…。少し驚いちゃつて」

萩は少し笑いながら言った。

「……どうした。何か考え方でもしてたのか?」

少々心配した面持ちで萩に尋ねる。

その言葉に

「……うん。ちょっと兄上の事をね、…思い出してたんだ。  
今田のようじに月が出てこる夜はよく、一人で月を見たんだ…」

なんとも言えない悲しい眼差しで月を見上げる。

彼の横顔の背景の暗闇がより一層、彼自身の心の闇をも映し出す。

「相模の事か…。俺は会った事ないんだよな…」

蒼全も萩と同様、なんとも言えない眼差しで月を見上げた。

「……うん。 だけどもし今、僕が当主じゃなかつたら、蒼全とも 東雲とも会つていなかつたのかもしれないね」

「……」

蒼全は萩が此方に向けた、持ち前の優しい言葉かつ微笑みに少し驚いたが、月を見ながら微笑んで言った。

「 そうだなあ……」

萩の先程の様子で分かつた事。

それは自分たち……蒼全……東雲に会えた事を心から喜んでいる事……。

……と、その時

二人の頭上から声がした。

「 萩様あああ～～！！！」

「 !? えつ……」

「 萩様」と呼ぶ声がだんだんと近づいてきた。

萩は上を向いた。

すると、屋根から幼女が萩の顔へと、ぽふつと落ちてきた。

「 んのあつ！？！？」

萩はすっとんきょううな声をあげた。  
その次に、蒼全の頭にもう一人の幼女が屋根から、ぽふふと落ちてきた。

「 .....」

蒼全はただ、沈黙のままだった。

萩の顔に落ちてきた幼女は、毛先を揃えた短髪の黒髪に、  
袂が長く、完全に両手がすっぽりと隠れるぐらいのぶかぶかの着物  
を着ていた。

名を雛芥子ヒナゲシといつ。

冥鬼ではあるが、人に害は起こさない。

萩たちと仲が良く、たまに家に遊びに来る。

蒼全の頭に落ちてきた幼女は、毛先を揃えた長髪の黒髪で、髪型が  
違うだけで他、容姿は

雛芥子同様。

名を雛菊ヒナギクといつ。

雛芥子と雛菊は双子の冥鬼で、いつも一人で行動している。

「 萩様、こんばんわあ～」

萩の顔の上で笑顔の雛芥子。

「 い、いんばんわ。雛芥子……お、重い…」

「 いんばんわ。萩様。いんばんわ。そー様」

隣では、おしとやかな雛菊。

「 …雛菊。『そー様』はやめろって…」

「 なにを言われるのです。そー様はそー様です」

「 ……」

困った様子の蒼全。

「 いんばんわ。雛菊…」

同じく、萩も困っていた。

その様子に気付いた雛菊は

「 あつ！ 雛芥子！！ 私たちが降りないと、萩様とそー様が

！？！」

「 ああーー！」

雛芥子と雛菊は軽い動きで一人から降りた。

二人は同時に息をはいた。

「 はあー…」

「 大丈夫ですか？ お一人とも」

心配した様子の雛菊。

「俺は、別に何ともない」

蒼全は答えた。

「僕もなんともないよ。ただちよつと、島苦しかつたけど」

萩もなんとか答えた。

「ごめんなさい。つい、一人ではしゃぎ過ぎちゃってえへへ」

「大丈夫だよ、雛芥子。そういうえば、一人ともどうしたの？」

こんな夜遅くに

萩が不思議そうに尋ねた。

「今日は満月で綺麗だったから、一人で遊んでたの。  
そしたら、萩様たちを見つけたから遊びに来ちゃったの」

雛芥子が笑顔で言つた。

「そうだつたんだ。なら、一緒に月見でもしようか？」

微笑む萩。

「えつ！いいの？萩様？？一緒に見てー？」

嬉しそうに尋ねる雛芥子。

「うん、いいよ。皆で見よう。ねえ？蒼全」

「ああ」

その言葉を聞<sup>き</sup>た

「やつたあ！ 雛菊、いいだつて！！」

「！！ やはり、萩様たちはお優しいです」

雛芥子も雛菊も喜んだ。

ちょうど その時

「あれ！？ 雛菊と雛芥子じゃない！」

東雲が奥からお茶と茶菓子を持って笑顔で現れた。

「あつ！ しー様だあ！！」

「しー様だあ！！」

二人はキヤツキヤツと嬉しそう。

「どうしたの？ 一人とも」

「遊びに来たんだつて」

萩が雛芥子を抱きながら言った。

「！ 一人とも遊びに来てくれたんだ～ 嬉しいな。

…じゃあなにか、お菓子でも食べる？」

「わあ～～い！！」

雛芥子と雛菊は共に喜んだ。

「はい。どお～ぞ」

「わあ～！～！」

二人はお菓子に飛びついた。

「しー様、ありがと～」

一人の声はよく合ひ。

東雲はお菓子を夢中で頬張る二人を見ていてふと、不思議に思った。

「そういうえば、雛菊と雛芥子って蒼全や私の事を『しー様』や『そー様』って言うよね？」

萩くんは名前なのに。……どうして？」

「ああ。それは俺も思つた」

蒼全もうなづいた。

「しー様やそー様は私たちにとつて言いやすいんだもん。萩様は『萩様』がいいんだもん。ね？雛菊」

「はい。雛芥子の言つとおりです」

「… そりなんだ〜 まあ、一人が言いやすいんならそれでいいん  
だけどね」

東雲は一人の可愛らしい様子に笑みを浮かべる。

それからの間、皆は楽しい時間を過ごした。

…これから先、萩たちを待ち構えるものが何なのかまだ…誰も知る  
よしはなかった

（冥鬼の影

闇夜の少女）

一刻 【完】

二刻に続く。

## ～消えゆく子供 現代の神隠し～ 一 前書き

ある日、萩たちの家に 一通の文が届いた。それは「現代の神隠し」との内容だった。

萩たちはさつそく依頼者のもとへと行つたが、そこでは：

## ～消えゆく子供 現代の神隠し～ 一刻

雲一つなく、青々とした空が広がっており、萩たちは清々しい朝をむかえていた。

「 ん~っ！ いい天氣～」

東雲は背伸びをしていた。

「 よしつー！ 今日も一日がんばりますかっー！」

東からの眩しい太陽を見ながら、<sup>フミ</sup>気合いを入れていた。ふいに東雲は、玄関先に置いてある文を見つけた。

「 あ、文が届いてる。えっと 緋ノ原 萩様： って事は、仕事の依頼かも！」

その後、文を持ち、居間へと戻った。  
居間では蒼全が早くも起きてきていた。

「 蒼全。萩くん、起きてきた？」  
「 いや。まだ起きてきていない」  
「 もう、萩くんたらあ」  
「 まあ、いつもの事だからな」  
「 私、起こしてくるね！」

「 もうした、東雲。今日はやけに厳しいなあ  
「 わつき、文が届いてたの。萩くん宛てに」  
「 萩宛てに？ という事は仕事の依頼」  
「 たぶんそう。だから今日は起こさないとね」

\*\*\*

一方、萩はといふと…

静かに熟睡していた。

そこへ、東雲が勢い良く襖を開け、入ってきた。

「 萩くんっ！」

すると、萩がこちらを向きながら熟睡していた。  
東雲は萩の寝顔を見た。

( …かつ かわいいい、 萩くんの寝顔おー！ いつ見ても、癒されるうーーー！

…つて私、何やつてるんだあ！ 今は そう思つてる場合じゃなーいっ！！

東雲は心で思つた事に、一人で突つ込んでいた。

「 萩くん！ もう早く起きないと……」

萩は東雲から掛け布団を勢いよく剥がされた。

「 ん~… まだ肌寒いよ、 東雲ー」

萩は布団一枚になり、寒そうに布団の中で丸まっていた。

「 萩くん、今日は長く寝とけない理由ができたんだよ！ 萩くん宛てに文が届いたんだからーー！」

「 僕宛てにー？ …ふああー…」

萩は大きなあくびをした。

「 そうー！ 萩くん宛てにーー！ だから早く 中を見ないとーー！」

その後、萩は立ち上がり、背伸びをした。

「 んつー！ 今日も善い天気だね。おはよう、 東雲」

「 もお、萩くんたらー おはよう」

二人は居間へと降りていった。

居間では蒼全が一人ぽつんと居た。

「おはよ。蒼全」  
「ああ、おはよ。今日は叩き起されたな」「  
あはは 叩き起こされちゃったよ」  
「それはそうと。文が届いてたらしいぞ。仕事じゃないのか?」  
「 そうだった! つとこの文か……誰からだろ?」

萩は文を開いた。

「えつと…」

横からは蒼全や東雲が中身を見ていた。

『式神師一族、緋ノ原家当主様。

この度は、依頼を存じ上げようと思い、この文を書かせていただき  
ました。

我らの村、カグラ神楽村で最近、村の子供たちが次々と居なくなるという  
事が起こっており、我々も皆で探しましたが、一向に一人として見  
つからず、戻つて来ないという現状です。

どうか、子供たちをお助けて下さい。お願ひ致します。

神楽村 代表：日向 ヒュウガ亞紗葉 アサハ

との内容だった。

「 神楽村つて たしか、阿郴狗羅アナクラノカミノ神が居る山の隣の村だよな…」

蒼全が不思議そつに言つた。

「 うん そうだよね。

阿郴狗羅ノ神ならば、隣村で起つてこゝる出来事に気付いてもおかしくないはずなのに…」

「 まあ 神だからといつて何もかもが、お見通しだらるとこつわけでもないしな…」

「 そうだよね～…」

萩たちが互いに納得しあつてゐると、そこへ東雲が話に入つてきた。

「 でもこんな今どき、珍しいよね。神隠しみたいなのなんて」

「 そういえばそうだね。僕も今までの依頼の中でこんなのは初めてだ。

子どもが次々といなくなるなんて」

「 ただの迷子じゃないのか?」

「 でも、蒼全。一人も帰つてこないなんておかしいよ。

… やつぱり、まずはこの、神楽村に行つてみないとね」

「 そうだな」

「 じゃあ、早めに支度をしよう」

萩がその場で立ち上がるつとした時

「『めぐら、萩くん。今回、私はちょっと…』

東雲が申し訳なさそうに萩に声をかけた。

「『どうしたの？ 東雲。どうか気分でも悪いの？』

萩が心配そうに尋ねた。

「いや、そのちょっとーー時雨ちゃんに誘われて…」「うなんだ。時雨さん！』…どこに行くの？』

「それが…私も詳しくはわからなくて」

「うん。…じゃあ、一人で楽しんできてね」

萩は微笑んで言った。

「いいの？萩くん！… ありがとーー」

喜ぶ東雲。

その後

「じゃあ、そろそろ行きますか！」  
「ああ

「 東雲、行つてくるね」

萩は後ろを振り返つた。

「 うん、二人とも気を付けてね。なにかあつたら呼んで…すぐに駆け付けるから…！」

「 ありがとう。東雲」

「 じゃあ、俺らは先に行くか」

腰をあげる蒼全。

東雲は一人を見送つた。

その後、家の中で東雲が外出準備をしていると玄関の戸が開く音がした。

「 御免ください」

「 あつ、はーい」

東雲はバタバタと階段を降りていった。

玄関では、おしとやかな雰囲気の女性が一人、立っていた。

肩までの長さで上髪の部分を後ろで結つた、毛先の揃つた薄朽ち葉色の髪に香色の瞳をもつ女性。

名を時雨シゲレといつ。

優利と契約を結んだ式神であり、外見は他、式神同様、齢、十七。

「 わはよつじあこます、東雲さん。お迎えに上がりました」

時雨が優しく微笑む。

「 おはよつ、時雨ちやん。

「ごめんね、まだ準備が出来てなくて…あと少しつとだから、居間で少し待つてもらつてもいいかな」

落ち着きのない様子の東雲。

「 あつ、いえ…私の方こそ、予定時間より早めに来てしまって…」

「 本当にごめんね」

東雲はまたバタバタと階段をかけのぼつていった。

少し経つて

「 『ごめん、時雨ちゃん。お待たせつて、ああ、・・・!』

東雲が階段から勢いよく滑り落ち、痛そうに床をついていた。

「……東雲さん大丈夫ですか！？」

時雨が心配そうに、慌てて駆け寄ってきた。

「あはははは……大丈夫だけどちよつとばかし、痛かったかも」

苦笑いの彼女。

「本当に大丈夫ですか、東雲さん！腰を痛められてませんか？」  
「大丈夫、このくらい。毎日のことだし……」  
「でも……」  
「大丈夫だつてほら、よつと」

東雲は立ち上がった。

「『じめんね、さつきから驚かせる事ばっかりで』

東雲は少々、頬を染めていた。

「あ、そうだ。時雨ちゃん。まだ聞いてなかつたんだけど、今日つて何処に行くの？」

思い出したように時雨へと尋ねた。

「あ、ああそうでした。まだ、東雲さんに行き先を告げていませんでしたね。

えっと……その、今日一緒に行こうと思つた所はですね 実は……

「

\* \* \*

その頃、萩たちはとこいつと…

ガラガラッ

「 蒼全…。なんで僕たちがこんなところを通りなくちゃいけないのかな…」

萩たちは崖沿いを通りていた。

「 俺だつてこんな所を通るとは思つてもみなかつた 」

「 よりによつてなんで、今日、この山をぬけるための唯一の橋が架け崩れてるんだ… 」

萩は愕然とした様子だった。

「 なんでも、昨日の強風で壊れたとか 看板に書いてあつたな 」

「 はあー…。帰りたい気分だよ 」

「 なに言つてるんだ、萩。依頼は最後まで果たさないといけないつて、自分からいつも言つてるじゃないか。 さつ、早く先進むぞ 」

先頭を行く蒼全は一人、先に進もうとしていた。

「え、あつ蒼全、ちょっと待つ……」

その時

ガラッ…

「えつ…」

一瞬、萩は宙を浮いた。

萩の異変に気付いたのか、蒼全は後ろを振り返った。

そこには、足元の崖が崩れ、宙に浮いた萩がいた。

「んなつ……！？」

萩は驚きの声をあげた。

萩の体がだんだん下へと向いていく。

蒼全はとっさに手を差し出し叫んだ。

「萩いイイイイイ  
！……！」

「うわああアアアアア…」

声が段と小さくなつていく。

萩は崖の下の森へと、真っ逆さまに落ちていった。

～消えゆく子供 現代の神隠し～ 一  
刻\*

ガサガサガサ バサツ ドン！…

萩は森の木々の間を通りて枯れ葉の山の上に落ちた。

「 いたゞ・・・」

萩は仰向けの状態だった。

「 萩いイイ つ！！ 大丈夫かあ ー？！」

崖の上では蒼全が萩の身を案じて叫んでいた。

「 ううう～ん…」

萩は仰向けのまま、まだ痛そうに答えた。

とその時

「 ほお～、今日はまた、変わった落ちモノだな～」

萩の頭上で声がし、顔を覗き込む者がいた。

白灰のくせのある長髪に銀の黄色混じりの瞳をもつ青年。  
名を阿那狗羅アナクラ<sub>ヲ</sub>カミノ神ノミヤザケという。

通称：阿那狗羅様。

外見は蒼全たちとさほど、変わらないようだ。  
本来の姿は犬神だが、いつもは人間の姿をしている。  
昔からこの、狗羅クラノ富山ミヤザケの守り神として崇められてきた。

「阿那狗羅ノ神！」

萩はとても驚いた様子でした。

「すごい驚きよつだな……緋ノ原家当主」

萩 同様、阿那狗羅ノ神も驚いた様子だった。

「阿那狗羅ノ神、どうしてこちらにいらっしゃるのですか！」

「おもしろい質問だな。どうしてって、ここは俺の居る山だからなー

……それに、珍しく、人の入った氣配がしたから様子を見にきたんだが……緋ノ原家当主。

今日はまた随分、変わった所から來たなー」

阿那狗羅ノ神は不思議そうに萩を見た。

「いえ……。その、落ちてきたのですが……」

「なんだ、落ちてきたのか！てつきり、今日は違った所から会いに來たと思つたぞ！」

笑いながら言つてゐる阿郴狗羅ノ神を見ながら、萩は

「…………」

ただ、呆れながらも見る一方だった。

その時、崖の上からと音がした。

見ると、蒼全が崖を上手く滑り降りてきていた。

そして、地へと足をつけ、萩の方へと駆け寄つて來た。

「大丈夫か、萩！どこか怪我したか」

心配した様子の蒼全。

「大丈夫。なんともないよ。ただ少し、衣の袖が切れただけ」

右頬に少し擦り傷を負つてはいたが、萩は平氣そうに言つた。

「すまなかつた…。俺が急がせたばかりに…」

蒼全はひどく落ち込んでいた。

「なに言つてゐるのさ、蒼全。僕がただ、弱音をはいて、注意不足  
だつただけだから  
蒼全が謝る事じゃないよ」

萩は逆にあたふたと焦つていた。

「だけど、しかし…」

その時

「お話し中、申し訳ないけど、俺の存在、忘れてない？」

阿那狗羅ノ神が二人の後ろから暇そうに声をかけた。

「阿那狗羅ノ神。…いつのまに其処にいたんだ？」

蒼全がとても驚いた様子でいた。

「いつのまに つて、蒼全、おまえなあー」

「最初っから僕と一緒に居られたんだよ。阿那狗羅ノ神は」

「 そうだったのか 気付かなかつた」

まったくもって気付かなかつたと言つよつて、ぽかんとした様子の蒼全に

「 …てめえ 」

「己を完全に忘れられていた事に怒りをおぼえたのか、ヴう、う、…と、犬のように唸る阿那狗羅ノ神。

「 ちよつ まあまあ二人ともー」

萩は二人の間に入った。

すると、阿那狗羅ノ神がなにか思い出したよつて口を開いた。

「……それはそうと。大丈夫か？ 緋ノ原家 当主」

今頃になつて、阿郴狗羅ノ神は萩の身を安じてきた。  
それに対し

「…………」

呆れる一方だつた。

同じく、蒼全はといふと…

( 普通、最初にかける言葉がそれだろ？… )

心の中で咳き、思つていた。

「 時に、緋ノ原家 当主」

( 今度はなんだろ？… )

阿郴狗羅ノ神の言葉に萩は思つた。

「 また、どうしてあんな崖添いを行つてたんだ？あの先は神楽村  
だが…例の神隠しの件か？」

その言葉に萩は

「 やはり、阿郴狗羅ノ神もお気付きでしたか」

「 村の奴らが騒いでたからな。…それに、神楽山の方で夜、氣配  
を感じて幾度か様子を見に行つたんだが…」

「 村ではなく、神楽山の方で…ですか？」

「ああ。それに、山に近づくと氣配が消えて、探そうとも探せなくてな…」

「……」

萩は阿郴狗羅ノ神の言葉を聞き、考えていた。

( 昼間ではなく夜…。近づくと氣配が消える…。  
もじや、その氣配の主は氣配を消せるほどの強い力の持ち主な  
のか… )

「 阿郴狗羅ノ神。その氣配は冥鬼でしたか？」  
萩は尋ねた。

「 最初は俺も冥鬼だと思っていたが、氣配が消える直前に微かだ  
が、冥鬼とは少し違った氣配が交じっていたな。  
だが一瞬しか感じれなかつたから、なんだつたのかはわからない」

「 そうですか…」

「 まあ、後の事は緋ノ原家当主たちに任せる」

阿郴狗羅ノ神は、萩の肩をポンポンと軽くたたいた。

「 おっ…そうだ。萩、蒼全…俺が村まで連れてつてやるよ」

そつと阿郴狗羅ノ神は萩たちを風の膜に包んだ。

「 …?」

驚く二人。

「なんだ、そんなに珍しいか?」

「その、…初めて阿郴狗羅ノ神の力を目の当たりにしたので」

「そういえば、人前で余り、力を使わなかつたなー」

\*\*\*

少し経つて

萩たちは村の入り口近くまで連れていってもらつた。

「ありがとうございます。阿郴狗羅ノ神」

「なーに、気にするな。んじゃ、後は頼んだぞ」

「はい」

萩たちは神楽村へと入つていった。

その一人の後ろ姿を見送っていた阿郴狗羅ノ神は

「…つたく、互いに知り合つて一年も経つてないからつて、心配

しづぎなんだよ。蒼全は

そつ噺くと、もと畠た山へと帰つていった。

…戻つてすぐに

「ほおー。神楽村へと行つてきおつたか」

何処からか、森の中で老人の声が聞こえた。

「うお、ビックリした!! …なんだ、ジジイか。いきなり驚かすなよ。気配も姿も消しやがつて。…いつ戻つてきたんだよ」

「言霊師が崖から落ちてきた時からじゃよ」

「『言霊師』って、いつの時代だよ。

今では『式神師』っていうちゃんとした名があるのをジジイは知らないのか?」

「わしは『言霊師』と言われていた頃から出雲仙人として今まで生きてきたのじゃ。」の呼び名でよい

出雲仙人は言った。  
イスモセソニン

「まあいいけど」

阿那狗羅ノ神はふわっと、木の幹に座った。

「…時に、おまえさんは行かなくてもよいのか?  
相手は、冥鬼は冥鬼でもあやつが降りているのじゃぞ」

出雲仙人は阿那狗羅ノ神に尋ねた。

「…緋ノ原家当主が以前にまして、どの位成長したかを見極める  
ためにも まずは様子見さ」

阿那狗羅ノ神は神楽村の方を見つめながら、薄ら笑もを浮かべた。

＊＊＊

その頃、萩たちは

神楽村へと入っていた。

そこは緑に囲まれ、沢山の民家があり、村のほとんどを水田が広が  
つていてる大きな村だった。

「ここが神楽村か」  
「空気が澄んでるな」

萩と蒼全は言葉を交わした。

「……一見、平和そうにも見えるんだがな」

「僕もそう思うよ。でも現に、村の子どもたちが居なくなっているのは事実だからね」

萩たちが話をしていると、

「おや、見慣れない顔だね。他の村の人かね？」

一人の村人が話しかけてきた。

「あつ、……いえ。こちらの村の方に依頼を頂いた式神師です」

「依頼？　ああ　もしや、貴方様が緋ノ原家当主様ですか？」

「はい」

「あ、いやいや、お待ちしておりました。では、日向家にご案内致します」

萩たちは、村人について行つた。

少し歩いて

「こちらです」

案内された先は旅館だった。

「ここは」

「この村で唯一の旅館で日向家が経営しております」

…それから少し経った頃。

村人たちが集まってきた。

「あの方が式神師様ですって」

「当主って言うから、もつとこう、大人だと思っていたが…まだ子供じゃないか」

「本当に当主様なのかしら…。式神師様って皆、あんなに若いの…？」

周りの大人が次々と言づ中、萩はただ黙つて聞いていた。

すると、騒ぎを聞き付けたのか旅館の中から一人の女の子が入り口を開けて出てきた。

「どうしたんですか？皆さん」

すると

「亞紗葉ちゃん！」  
アサハ

村人がザワザワと騒ぎだした。

肩までの長さの黒髪に漆黒の瞳をもつ少女。  
外見からして十五、十六だろうか。

亞紗葉は村人たちを一度見た後、チラツと横に居た萩たちを見た。

「あなた方は」

「あ！　僕らは依頼」

「もしや、式神師様でいらっしゃいますか？」

萩の言うなか、亞紗葉は唐突に聞いてきた。

「……はい」

萩は目をぱちくりさせ、驚いた様子で答えた。

「お待ちしておりました。 セ、中へどうぞ」

萩たちは一礼をして、中へと入つていった。

入つてすぐの所で、旅館の関係者たちが横一列に並んでいた。

「いらっしゃいませ」

萩たちはまた、一礼をして上がつていった。  
：すると

「ああ～やつぱり旅館つていいねえ～ 時雨ちゃん

萩たちの前を一人の客が通つた。

その二人を見て、萩と蒼全は驚いた。  
まず先に口を開いたのは萩だった。

「東雲に……時雨やん！」

～消えゆく子供 現代の神隠し～ 一  
刻＊＊

その言葉を聞き、東雲と時雨は萩たちの方へと向いた。

「 萩くん…蒼全！」

東雲と時雨は萩たち同様、驚いた様子だった。

「 どうして此処に 」

蒼全も不思議と尋ねた。

「 いや、私たちはここに旅館に泊まりに来てて 」

萩たちの会話を田の当たりにして聞いていた亞紗葉が不思議そうに尋ねてきた。

「 お二人は、式神師様のお知り合いで？」

「 ええ 」

萩は答えた。

「 行くとは聞いていたが…まさか此処だつたとは」

未だ、驚いた様子の蒼全。

すると、萩はハッとなにかに思い出したかのように口を開いた。

「……そういえば、どうして東雲たちは先に出た僕たちより早く此処に着いてるの？」

萩が不思議そうに尋ねた。

「どうしてって、途中、架かつてたつり橋を渡ってきたんだよ。……そういえば萩くんたちが私たちより遅いって、どうして？」

その言葉を聞き

「橋が架かつてたあ！？！」

「う、うん」

萩と蒼全は顔を見合せた。

「だが、俺たちが行つた時はまだ橋が架け崩れてて」「でも、私たちが行つた時には橋はちゃんと架かつてたよ」

すると、時雨が

「そういうば、橋の前に看板がありませんでしたか？『橋は架け直されました』と」「あつ！ そういえば、そんな看板もあったね」

すると

「そつ……そんなあ～」

「

萩はその場にペタンと座り込んだ。

「あんなにも苦労してここまで来たのに…水の泡なのか…」

「……」

萩の言葉に蒼全も唯々黙る一方だつた。

「そんな、萩くん…蒼全まで…」

そんななか

「あのぉ…」

畠紗葉がおひおひとした様子で声をかけてきた。

「え」

萩と東雲が同時に言葉を発した。

「あ、やうだつた！こんな事をしていく場合ぢやなかつた。東雲、時雨さん。また後で」

萩はそつまつと、蒼全と共に畠紗葉に案内されて行つた。その後、東雲たちも部屋へと戻つていつた。

途中、時雨が東雲に話し掛けた。

「東雲さん、萩様たちはいじに依頼を受けてこひらに来ていらっしゃるんですね？」

「一緒に緒されなくてよいのですか?」

「うん、大丈夫。私が萩くんに何かあつたら直ぐに呼んでねって言つてるから。

私はただ、それを待つだけの事だよ」

東雲は時雨に優しく言つた。

\*\*\*

部屋へと案内された萩たちは亞紗葉から話を聞ひつつしていた。

「申し遅れました。私が依頼を致しました、日向<sup>ヒュウガ</sup> 亞紗葉<sup>アサハ</sup>と申します。

当旅館の女将代理をしている者です」

「女将代理さんですか」

「はい。女将 私の母は今、急用で他の村へと行つております」  
「そうなんですか。それとあと一つ、お聞きしたかったのですが……

亞紗葉さんはこの村の代表の方だとか

「……はい。しかし、見ての通り私はただの代表なだけで、村長ではありません。

先月、村長が亡くなられてからはまだ次期、村長が決まっておらず皆の話し合いの結果、日向家が次期村長が決まるまでの代表として話が進んだのです」

「それでさつき、村の方々があんなにも驚いて」

「皆さん、驚きすぎなんですよ。私はそんなに偉い立場じゃないのに…」

…その言葉を聞き、

「僕も、皆に『当主様』と呼ばれるような者でもないのに…」

「なぜです？」

「僕はまだ、当主といつ名の器には経験にしろ実力にしろ、まだ程遠いのです」

「あの…。失礼かとは思いますが、当主様はいつ頃…」

「式神師は満十五で、現 当主から、当主の座を受け継ぎます。しかし、僕はまだ当主となつて早 十ヶ月。まだ一年も経たずの未熟者なのです…。それで」

亞紗葉は黙つて話を聞いていた。

「当主様も、とても苦労されているのですね…。

わかりました。では、まだ『当主様』に慣れていらっしゃらないのであれば『萩様』と

お呼びしても宜しいですか？」

その言葉を聞き萩は笑顔で

「あつ いえ『やまと』はつけなくても」

「いいえ。次期当主となられる御方なのでつけさせて頂きまわ」

亜紗葉は微笑んだ。

「……」

萩は少し照れ臭そうに下を向いたままだつた。

「……では、萩様。例の子どもたちの件ですが……」

亜紗葉が話を進めようとした時

「亜紗葉～！村の人から聞いたんだけど、式神師様が来てるって  
……」

バタバタと足音を響かせながら、その声の主が障子を勢いよく、開いた。

萩と亜紗葉は声の主を見上げた。

焦茶色の長髪に、黒色の瞳をもつ女の子。  
外見は亜紗葉とあまり変わらないぐらいだ。

「あつ……」

女の子は驚いた様子だった。

「りつちゃん……！」

亜紗葉が言葉を発した。

「『じつじめん』お話し中に……」

女の子は障子を閉め、出て行つた。すると

「あつ、ひょっと待つて、りつちゃん。  
今から式神師様に子どもたちの話をするから、りつちゃんもこの村  
の者として、話に立ち合つてほしいの。それに、りつちゃんの事も  
紹介したいから…」

その言葉を聞き

「えつ、あたしも…いいの？」  
「うん。だから、りつちゃん…」

障子を開いて女の子が入ってきた。

女の子は入つて、左側に居た萩に気づき、田を向けた。

萩は女の子と目が合ふ

「初めまして」

微笑んだ。

その瞬間、女の子は顔を真っ赤にしておひおひとした面持ちで一礼  
をし、亜紗葉の隣に座つた。

「萩様、じちらは  
「初めまして。峰藤<sup>ヒメフジ</sup>律<sup>リツ</sup>と言います」

亜紗葉の紹介に、律は自分で名乗つた。

「 初めまして、律さん。式神師の緋ノ原 萩と申します」

「 緋ノ原 萩さん…」

律はボソッと萩の名前を繰り返した。

「 お二人は 「

萩が尋ねると

「 亞紗葉とは幼い頃からの親友です」

笑顔の律。

「 そうだったんですねか 「

萩が微笑む。

\* \* \*

それから、話は進み…

「 では、子どもたちが居なくなつたのは、つい最近の事なんで

すね?」

「 はい 「

萩たちの周りは張り詰めた空氣に包まれていた。

「 居なくなつた子どもたちに共通点ひしきものはないませんで  
したか? 」

「 共通点? 」

亜紗葉と律は顔を見合わせ

「 いえ…。共通点ひしきものはないかと 」

首を傾げながら、亜紗葉は答えた。

「 … 最後に。子どもたちが神隠しにあつ前になにか、前兆といっ  
たことは? 」

「 それも無いかと 」

「 … そうですか。 わかりました。お話を聞かせて頂き、ありが  
とうございました」

「 あつ、いえ。 私どももお役にたてずに…」

萩と亜紗葉が言葉をなくした後、

「 あの、当主様! 居なくなつた子どもたちを…」

律が萩に話しかけていると亜紗葉が律の肩をつつき、耳元で「onso」と何かを話しているようだ。

そして

「 あの、式神師様。…萩さんとお呼びしてもいい でしょうか?  
亜紗葉から式神師様が当主様と呼ばれることに慣れていないとか…」

「……！……はい。宜しくお願ひします」

最初は少々驚いた様子だったが、萩は笑顔で答えた。

「りつちゃん。次期当主様となられる御方にそんな、萩サンなん  
て……」

「いいんです。僕も、こちらの呼び名が嬉しいんです」

嬉しそうな彼。

「では、改めて。萩さん！居なくなつた子どもたちをどうか  
見つけてください。お願いします！」

「必ず、子どもたちをこの村へ連れてきます……！」

……その後、亞紗葉と律が先に部屋を出でていった。

「蒼全」

萩は隣の部屋で待機していた蒼全に声を掛けた。

「ああ。聴いていた」

蒼全が言葉を返した。

「やつさんの話からして」

「直接、その神隠しにあつたていう山に行く必要があるな」

「 そうだね」

そういふと、萩と蒼全は旅館を後にした。

\* \* \*

…少し経つて

萩たちは神楽山の森の中にいた。

神楽山は狗羅ノ山よりは、少し小さめの山で、昔は土地神が居たらしいが、今は居ないようだ。

「 はあ…。この山つて見た感じじゃわからなかつたけど、案外広く感じる なー、…よつ」と

萩は横に倒れた木を跨いだ。

「 だな」

蒼全も萩の後ろから来ていた。

「後、思つたんだけど、さつきから冥鬼の姿を見かけないよね。  
土地神も居ないからかな?」

「そうだな。だが、こりゅう山だからこそ、好き勝手に縄張り  
が沢山あってもおかしくないんだが…」

二人が話をしながらいっていると前方に黒翼の生えた人影が二ちら  
に背を向け、片膝を立て、座つてた。何かしている様子だ。

先を歩いていた萩はその人影に気づき、立ち止まつた。  
萩の後ろを歩いていた蒼全は不思議そうに尋ねた。

「どうしたんだ、萩?」  
「あれは…」

萩はその人影に近づいていった。

「…?」

その後ろを蒼全がついていった。

「…!」

ザツ ザツ

足音に気付いたのか、その人影が後ろを振り返った。その様子に、萩も驚きながらも

「あつ！ごめん。驚かせちゃったかな。  
…その君はもしかして黒天狗<sup>クロテング</sup>…だよね？」

そこに居た人影は、黒髪の長髪に橘色瞳<sup>タチバナ</sup>を持ち、背中には闇色の黒翼の生えた少年。

外見は萩とあまり変わりないか、一つ上ぐらいだろうか。

下駄のようなものも履いている。頬には泣いたあとが残っていた。

黒天狗は萩たちの言葉に

「自分が…見えるのですか？」  
「うん、僕らには見えるんだ」

その言葉に

「いかにも。自分は黒天狗です。あなた方は？」  
「僕は式神師の緋ノ原 萩で、後ろから来ているのが僕の相棒の式神、蒼全」

紹介されながらも後ろからやってきた蒼全が

「萩、なにやって…」

蒼全が萩の前に居た人影に気が付いた。

「……黒天狗！ なんだ、やつぱり冥鬼はいたのか？」

黒天狗は少し警戒した様子だった。

「えっと、君の名を聞いていいかな？」

萩は黒天狗に尋ねる。

「私はただの黒天狗です。名は元々からありません」

「そう…なんだ」

萩はふと、黒天狗の手を見た。  
土で汚れていた。

「えっと、君はここでなにをしていたのかな？それに泣いたあとが…」

見ると黒天狗の座っている前には埋められた石があった。  
墓石のようにも見える。

「墓を…つくつてたんですね」

「…墓」

萩と蒼全は同時に言葉を発した。

「はい。仲間の墓を」

「その…、詳しく話を聞いていいかな？」

： 黒天狗は語り始めた。

～消えゆく子供 現代の神隠し～ 一  
刻＊＊＊

「仲間と言つても、同じ黒天狗ではないのですが、ここでは私を含め、沢山の種類の冥鬼が、土地神がないぶん、自由気ままに住んでいました。

しかし、数日前でしょ？仲間の冥鬼が山のあちこちで遺体となつて見つけられました。その遺体は食い殺されており、ほぼ骨しか残つておらず周りには凄まじい量の血が赤黒く残つており、まだ乾ききっていないものもありました。次の日も、また次の日も。皆、警戒しあつても犠牲が増える一方で…。

そして、今日もまた、数少ない仲間が殺されており…残つたのは私一人だけとなりました」

＊＊＊

その後、話し終えたのか、黒天狗は萩たちに

「式神師様、式神様。どうか、仲間を食い殺した者を見つけてください。

そして、その後は自分が…」

萩と蒼全はその様子を見ていた。

そして

「うん。僕たちが必ず見つけるよ。絶対に……」

すると、黒天狗の瞳から涙が頬を伝い

「ありがとう」「わざわざ」

萩は微笑んだ。そして

「じゃあ、いくつか聞いていいかな?」「?

「」の神楽山に夜、なにか、力の強い冥鬼が来たりしてないかな?  
見たところ 君も力が強いみたいたけど 気配とか感じたりしない?」

「…いえ なにも 「

「じゃあ、村の子どもたちを見かけなかつた?」

「村の子ども ! ! ?」

「うん。今、神楽村の子どもたちが次々と神隠しにあつてゐるんだ」

「じつ 、自分はなにも…」

「そつかあ ー ありがとう。君も夜まで氣をつけてね

「夜まで ですか?」

「うん。夜まで… …じゃあ、僕らはまた、色々と散策しますか」

萩が後ろを振り返る。

「 そうだな」

すると、萩がなにかを思いついたのか、振り返り

「 そうだ…！君にまた、お願ひをしてもいいかな？」

萩は黒天狗に尋ねた。

「 なんでしょ？」「

「 ここの、神楽山で冥鬼たち 君の仲間の墓石の場所を教えてくれないかな？」

なにか手がかりが見つかめるかもしないと思つて。 僕たち、こここの土地勘は、まったくなくてね。

…墓石を巡るのは君にとって苦かもしけないけれど…お願ひします

「

萩は頭を下げる。

その様子に蒼全と黒天狗は驚いた。

「 わかりました。仲間を…村の子どもたちを助けるためならば

…」

「 ！ ありがとう…」

「 ですから、頭を上げてください」

「 あっ、あははは…」

萩は照れ臭そうに笑いながら頭を上げた。

それから、萩たちは墓石を巡つていった。

途中、蒼全は大きな岩を見つけ、立ち止まつた。

「 萩」

「 ん？どうした？蒼全」

前を行つていた萩と黒天狗が後ろを振り返つた。

「 あの大きな岩はなんだ？」

蒼全は岩の方を向きながら言つた。

萩たちの左側の先の林の隙間から大きな岩が見えた。

「 あ、あれは昔からある洞窟だつたんですが、何かの理由で塞がれただんです。

あの岩の後ろが入り口です」

黒天狗が説明した。

萩はスッ と、目を細め、その大きな岩を怪しげに見つめた。

そして

「 ふーん…行つてみよう」

萩たちは大きな岩の近くに行つた。

「 さつき、この洞窟が塞がれたのって何かの理由って言つてたけど それってなにかな？ 知ってる？」

「 いえ、この山に居た自分たちもなぜかは分かりません。ただ、この洞窟は昔、土地神様が居られた場所なので今、居られない分、むやみに中に入つてはいけないとだけしか…」

「『土地神』ねえ…」

萩はじつと岩の中心を見つめた。

そして、蒼全と共に大きな岩の周りを見回つた。

「 蒼全 動きそう？」  
「 ダメだ。びくともしない」  
「 手伝おうか？」  
「 いや、こんなに岩が大きいんじゃ、ここに居る三人がかりでも動かないだろ」  
「 ……ということは、この岩じやないってことか…。もし、動くんだったらこの中に神隠しにあつた子どもたちが居ると思つたんだけど」

「 だが、その力の強い冥鬼だつたら出来るんじゃないのか？ 子どもたちをやつして、冥鬼どもを食らつた奴ならば」

「 でも、誰も見てないつて…。…じゃあ、今夜あたりにも…」

萩は岩に耳をあてた。

「 なにか聞こえるか？」

「 いや 。 風の音しかしない」

（ それに 異臭もしない。

風が入るぐらいの隙間があるんだから、もし子どもたちが冥鬼たち  
のように食い殺されて、この中にいたとしても、冥鬼より人間の臭  
いの方が強いはずだ。

今のところ分かる事は子どもたちが無事な事ぐらいか…）

萩は心の中で呟いた。

「 … どうします？」

黒天狗が一人に聞いてきた。

「 先、進もつか」

\*\*\*

その後、萩たちは隈無く山を散策した後、旅館へと戻ってきた。

空では、日が南西の方角に傾き始めていた…

旅館へと着いた萩たちが草履を片付けていると律がパタパタと駆け寄ってきた。

「お二人とも、どちらにお出かけになつていたんですか？　姿が見当たらなかつたので」  
「ちょっと、神楽山まで」  
「！　そう　だつたんですか」  
「すみません…。なにも言わずに」  
「あつ！　いえ、その私が勝手に探していただけなので」  
「？」

その時、左側の通路から亜紗葉が萩たちの姿を見つけ、駆け寄ってきた。

「萩様、蒼全様」

その言葉に

「蒼全　でいい」

指摘する蒼全。

「あつ、　いえ…では、萩様、蒼全さん。お帰りなさいませ」  
「えつ！　あの、その今、戻りました」  
「同じく」

萩と蒼全は少しかしこまつた様子だった。  
亜紗葉はチラツと蒼全を見た。

亜紗葉の様子を見て、律はハッとした様子を見せ、

「 萩さん 」

「 ？ はい」

「 おっ 、お疲れ様です！！」

「 ！ ありがとう。律さん」

萩は一瞬、驚いたようだが、微笑んだ。

すると、律は赤面した。

萩たちから離れたところで、その様子をうかがっていた東雲が

「 もしかして 律ちゃんや亜紗葉ちゃんて

「

\* \* \*

：それから、萩たちとの話が終え、亜紗葉と律が部屋に戻ろうとした時

「 亜紗葉ちゃん、律ちゃん」

二人を呼ぶ声がし、振り返ると、通路の柱から手招くのが見えた。

「 …？」

二人は不思議に思い、その手招く方へと近づいていった。  
そこには東雲の姿が。

「 東雲さん！」  
「 東雲サン！！」

驚く一人。

「 どうしたんですか？ 東雲サン」

律が尋ねる。

「 いや、その実はね、一人に聞きたい事があつて  
「 なんですか？」

不思議そうにしている亜紗葉。

「 率直に聞くかもしないけど…一人は気になる人と好きな人が  
いるでしょ？」

「 ！？」  
「 なつ ！…！」

亜紗葉と律は口を開き、驚く。

二人の様子を見た東雲は確信した面持ちで

「 亜紗葉ちゃんは、蒼全の事が完全に好き というのではなく、  
少し気になるぐらいで、あまり表情にはださない感じ。 で、律ちゃんは確実に萩くんの事が好きで、凄く表情に出やすい感じ…かな

（

東雲は口元が緩みに緩んだ様子で、ちらりと隣にいる一人を見た。

「・・・」

隣では東雲の言葉に全てを見透かされたよう、「ぽかんとした様子の亜紗葉と律がいた。

「んふふふふ」

東雲はにこっと笑いかけた。

「もし、律ちゃんと亜紗葉ちゃんが一人に気持ちを伝えたりなんなりするなら、

早めに言つていたほうがいいよ」

「えつ…」

律が声をもらした。

「たぶん、明日にはここを立つだろ?からね」

東雲が亜紗葉たちから少し目を逸らし、遠い眼差しで話す。

「そりなんですか?」

訝しげに亜紗葉が尋ねる。

「たぶんね。だから、伝えたかつたら今のうち行つておいで」

「……」

一人は黙り込んだ。

「 わあ～て、私は部屋に戻らつかね」

一言いいつと、東雲は部屋へと戻つていった。

\*\*\*

東雲が戻ると、部屋では時雨がすぐにでも部屋を出るといった様子で荷物をまとめていた。

「 どうしたの、時雨ちゃん」

「 あっ！ 東雲さん！！」

「 なにかあつたの？」

「 はい。実は 優利様から、お呼びがかかりまして」

「 えつ 優利様から……ことは、少しばかり手こずつてるつて事

？

「 おそらく」

「 優利様たちのところにも厄介な冥鬼が…」

「 ですので、私はここで」

時雨が荷物を持とうとした時

「 待つて、時雨ちゃん。冥鬼とやつている時、荷物邪魔になるから私が後から届けておくよ」

「 いえ、しかし

」

時雨は東雲の真剣な眼差しを見た。

「 わかりました。では お願いいいたします」

時雨は、一言 礼を言つとスッ と姿を消した。

部屋で一人残つた東雲は心配そうに小さく呟いた。

「 萩くんたち、今回は大丈夫かな…」

～消えゆく子供 現代の神隠し～ 一  
刻\*\*\*\*\*

\*\*\*

部屋に戻つて來ていた萩と蒼全は休んでいた。

「 いよいよ今夜だね」

「 そうだな」

「 夜までには少し時間ができたみたいだね」

空を眺める萩。

「 ああ。日が完全に沈むには一時間ばかりあるな」

…その時

「 萩くーん、蒼全。入つてもいいかな？」

ふいに、入り口の襖の向こうから東雲の声がした。

「あつ！ 東雲？ うん、いいよ」

萩の声と共に、東雲が入ってきた。

「二人とも、何してたの？」

「ん？ 夜まで少しあるなーって、蒼全と話してたところなんだ」

「ふーん。そうなんだ。じゃあさ、今から体を休めにいかない？」

「えつ…？ 休めつて…」

「温泉だよ、温泉」

「お、温泉」

なぜか少し驚いた様子の萩。

「また唐突だな。東雲」

蒼全もまた、驚いた様子。

「だつて、せっかく旅館に来たんだから、露天風呂ぐらい入らなきや！」

それに、萩くんや蒼全だつて今日一日、歩き回ったんだから汚れを落として、

疲れもとらないと、仕事になんないよ」

その言葉に、萩と蒼全は

…クスツ

「まあ、そうかもね」

「だな。この後も、仕事が残ってるしな」

二人は笑いをこぼしつつ言った。

「そうと決まれば早く準備する！じゃあ、私はここいらで退散しますか」

東雲は部屋を後にした。

\* \* \*

少しばかし時間が過ぎ…

ガラツ…

「 わ〜、露天風呂だ」

男性陣二人は露天風呂に来ていた。

「 けつこう広いな」

蒼全が周りを見渡す。

「 僕たちだけみたいだね」

チャプン…

二人は湯に浸かった。

「 気持ちいいな」  
「 ああ。あまり、こういった機会はないからなー」

…とその時

ガラツ…

「おおー 広おーい！！」

隣の女湯から、東雲の声が聞こえた。

次に亜紗葉と律の声がした。

「喜んでいただけて光栄です」

「やっぱ、亜紗葉の所の露天風呂は他のと違つね」

「あ、東雲たちが来たんだ」

隣の男湯では、萩たちが東雲たちの声を気付いていた。

「 萩くーん、蒼ぜーん。 何の?」

東雲の声が男湯に向けて向けられる。

「 んー。 いるよーー」

萩の声がかえってきた。

「 えつ!..萩さんが!..?」

「 蒼全さんが!..?」

律と亜紗葉、二人驚く。

「 あの二人の声だな」

蒼全が呟いた。

「 そっちの湯加減ビーですか~」

「 うん。 気持ちいよいよ、..ね?..蒼全」

「 ああ」

「 ..だつてや」

東雲は亜紗葉の方を向き、悪戯笑みを浮かべた。  
亜紗葉は嬉しそうに微笑む。

「 じゃあさ、萩くんだち..」  
「 .....?」

萩と蒼全は東雲の声に耳を傾けた。

「私たちが、お背中流しにそつちに来ようか?」

「へつ……?…」

「んなつ……!…?…!」

東雲からの突然の予期せぬ言葉に一人は度胆を抜かれたような声を上げた。

「あはははは。嘘に決まってるじゃーん

東雲が笑いながら言つてきたり

「……」

「もしかして期待してた?」

「……」

「違つよ 東雲ーなに言つてゐのヤーー!」

「あははははは」

女湯では、東雲の笑い声と律と亜紗葉の少笑いの声が響いた。

\* \* \*

…その後

衣を着て、数珠を首から下げ

「 よし」

そこには、式陣衣を身に纏つた萩の姿があつた。

式陣衣とは式神師の仕事着のことだ。

「 準備出来たな」

壁にもたれ、座った状態の蒼全がじらりを見ている。

「 蒼全。そろそろ行こうか

「 ああ」

萩たちは廊下へと出た。

＊＊＊

…その頃

「 はあー、気持ち良かつたー」

律が一人、廊下を歩いていた。

「 ……そういえば、亜紗葉。今日は一人、部屋に戻つていったけど  
…どうしたのかな?

具合でも悪くなつたのかな」

考え事をしていると、律の右のほうの庭を一人、南側に歩いていく

人影を見た。

「……ん？」

律が目を凝らしてその人影を見ると、亜紗葉の後ろ姿だった。

「……亜紗葉？ 亜紗葉ー！」

亜紗葉だと認識した律が外にいる亜紗葉に呼びかけた。

「亜紗葉ー、なにやつてんのー？」

「……」

律の呼びかけに返事がない。

「……？ 亜紗葉ー！ 亜紗葉つたらあー！」

「……」

「あれ……？ おかしいな……」

すると

「どうしたんです？律さん」

律のいる西側と向かい合つ東の廊下から萩と蒼全がやつてきた。

「あ、萩さん。やつきから庭にいる亜紗葉に呼びかけてるんですが…  
様子がおかしいっていうか…応じてくれなくて…」

「…？」

萩たちが庭にいる亜紗葉を見ると亜紗葉は、一直線に南へ向かって  
ゅっくりと歩いていっていた。

「…南…？　あっちの方角は…」  
「神楽山の方だ」  
「！…まあいつ！亜紗葉さんつ…！」

萩と蒼全はすぐにその場を離れ、亜紗葉を追つていった。

すると、亜紗葉の歩く速さが増し、萩たちと距離が開いてきた。

「速さが増した…！」  
「亜紗葉が次の標的だったか」

二人は全速力で亜紗葉を追つた。

\* \* \*

ザツザツザツザツ

萩たちの走る足音が夜の森に響いていた。

「 くそつ…、見失ったか…」

ハア…ハア…ハア…ハア…

蒼全は息を切らしながら言つた。

「 でも、まだそんな遠くに行つてないはずだ。 探してみよ

う

萩も疲れた様子だった。

二人が亜紗葉を探していると、夜空の雲の隙間から月明かりが萩た

ちの足元を照らしてきた。

「 満月…」

「 こんな夜に満月なんてね…」

萩が月を見ていると

「 萩！」

突然、蒼全の声がし、萩は蒼全の方を見た。  
すると、萩と蒼全の足元に一人と別の足跡が残つており、前方に進  
んでいた。

「 これはもしかして…！」

「 ああ。もしかしたら、亜紗葉の足跡かもしけない」

「 追つてみようーー！」

二人は足跡を追つた。

ザツザツザツザツ…

少し進むと

「 … 」

萩が何かに気付いたのか、立ち止まつた。

「 どうした 」

「 ちょっと待つて 」

萩が月の隠れた真つ暗な道の途中、遠く離れた前方にぼんやりと、二つの人影らしきものを見つけた。

そこは昼間、萩と蒼全が黒天狗と共に立ち寄った大きな岩の所だつた。

「 あれ 」

「 ？」

「 あれ 」

萩の指差す方を蒼全も暗闇に慣れてきた眼で見つめた。するとやはり、前方の岩の前でぼんやりと人影を見つけた。

「 あれは… 」

「 たぶん、亞紗葉さんだよ 」

「 ジゃあ、もう一つは… ! 」

「 すべての発端の元だろうね… 」

「 なら、今すぐにも… 」

蒼全が駆け出そつとした時

「 待つて、蒼全。… 少し様子を見よう 」

萩と蒼全は草むらの中に身を隠し、ゆっくりと人影に近づいていった。

「一つの人影のうち、一つが岩に近づき、何かをしていくようだ。

すると、岩が大きな音を立てて、左側に動き、中には真っ暗闇が広がっていた。

洞窟のようだ。

「……！ 岩が動いた」

「……やはり、あの洞窟だつたんだ」

「じゃあ、中に誰…」

「ほほ、そうだろね。……後、死んでないと誰、衰弱していると思ひ。

岩を塞がれる前に行こう、蒼全」

「ああ」

その時、夜空では月を覆っていた雲が完全に無くなり、月明かりが一つの人影をすこじづつ、照らしていった。

人影のうち、一つは畳紗葉で、もう一つは

萩はその姿を見た瞬間、勢いよく、その場の草むらから立ち上がり、思わず声を出してしまった。

「……君は 昼間の……」

萩の行動に蒼全は慌てた。

「……つ、萩！」



## ～消えゆく子供 現代の神隠し～ 一 刻＊＊＊＊＊

月明かりに照らされ、現れたのは畠間、萩たちと行動を共にした黒天狗の姿だった。

萩の言葉で、こちらの存在に気付いたのか、黒天狗が萩たちの方をゆっくりと見た。

「 めや…。今日は鼠一匹…いや、一匹付いてきたか」

萩の後ろで蒼全が立っていた。

「 どうして君が…」

萩が恐る恐る尋ねた。

「 もしや、貴様の言つ身体はこの器の事か?」

「 器…?」

「 そうだ。この器だ」

「 …畠間と様子が違つ」

蒼全が真剣な眼差しで黒天狗を睨む。

黒天狗は、萩の身なりに目を通し

「 その身なり…。式神師か。」

ならば、後ろの奴は式神といったところか。先程は、完全に気配を

隠していたようだが

「 … ああ。 そうだ」

蒼全は言葉と共に、式神としての本来の姿となつた。

「 君は、昼間の黒天狗と違つ よね…」

尋ねる。

「 そうだ。 我は名もなき神。 この身体は我的器だ」「 この者（黒天狗）に乗り移つたか…」「 肉体のない我にとつて丁度良い器だつたんでな。 それにこの身体とは呼び合つたようなものだ」「 呼び合つた？… それはどういう意味だ」「 ふんっ… これ以上の事は貴様らには関係のない事。 知る必要はない」

黒天狗は後ろを振り返り、亜紗葉を洞窟の中へと入れた。

「 亜紗葉さん！」

萩の言葉に亜紗葉はぼーっとした眼差しで振り返つた。

自ら意識がないように見える。  
どうやら、操られている様子だ。

「 ……」

「 貴様の声などで、我が術が解けるわけなかつ」

亞紗葉はまた、後ろを振り返り、洞窟の中へと進んでいった。

「 亞紗葉っ……」

蒼全が、亞紗葉のもとにかけよつとした時

ビリッ……

「 なつー?」

蒼全がなにか得体の知れないものに触れた。結界のようだ。

「 村の子らは、貴様らには渡さん……！」

黒天狗が薄ら笑みを浮かべながら岩に触れよつとした瞬間

シャラーン……

ビシッ

「 つ！」

黒天狗はバツと後ろを振り返った。

背後では、萩が数珠を手に巻き、札を片手に持つた状態でいた。

「 貴様ア」

「 塞がれては困るので」

「 式神師ごときが結界など張りおつて… 我の邪魔をするというのか…！」

「 あいにく、あなたの目的を阻止することが僕たちの仕事の目的のようなので… 邪魔させていただきます」

「 おのれ…！」

黒天狗が萩に襲い掛かつてきた。

「 萩！」

萩は、右手首を軽く上下に振った。

すると、ショットガンが現れ

## カキン、カキーン…

萩は黒天狗のかまいたちを槍でなぎ払った。

「 チツ…！、こしゃくなア…！」

黒天狗が萩と距離をとつたとき、背後から水龍が大きな口を開け、襲ってきた。

「 何ツ…！？」

黒天狗は危機一髪という所で蒼全の攻撃を避けた。

「 貴様らのような者が神に葉向かつ刃向かつとは…いいと思つてゐるのか！」

黒天狗は怒り狂つた顔で萩と蒼全に怒号を上げる。

その言葉に萩は力強く、

「 神であろうと一度、自らの欲望に墮ちたものはもう『神』ではない。…『冥鬼』だ」

「 自ら力を、肉体を欲する事の何が悪い！多少の犠牲は必要だ」

「 あなたは罪を犯しすぎた。人間を…冥鬼を…。その時点で神の

する事ではない」

「 黙れっ！人間風情が！！我が邪魔はさせん。消し去つてくれる  
！！」

その瞬間、黒天狗は一気に力を溜め始めた。

ビリッ ビリッ…

「 ！？」

萩と蒼全は身にふりそそぐ力の強さを感じていた。

「 なんだ …この力は…」

蒼全の表情が、一気に険しくなった。

「 さつきと桁外れに違う そして、この感じ… もしかして、器となつて いる黒天狗の力と中の冥鬼の力が一つになつて いるのか！？」

「 何つ！」

「 黒天狗自身の力が元から強い…。それに神の力が加われば…マ

ズイツ！！

力の増幅を押さないと今の僕たちじゃ、太刀打ち出来ない！」

「……くそつ」

萩と蒼全は互いに黒天狗に攻撃を仕掛けた。

「たあアアアアアー！！！」

蒼全は氷柱を立て、六匹の水龍を黒天狗に向けて勢い良く放った。氷柱は崩れ、水龍は見事、黒天狗に命中した。

「……」

しかし、次の瞬間

「……貴様らの力はそのようなものか」「

蒼全の力をまともにくらつたにも関わらず、衣一つ切れていない無傷のまま、

黒天狗がその場に立っていた。

「なんだと…つ！？」

蒼全は驚きあまた表情をした。

反対のほうでは、萩が言靈を唱えようとした時

「少しの間、貴様らの相手は我ではない」

そういうと、黒天狗は右手を左前に突き出し、右へと動かしながら

「主たる声を聞け。我が下アヘに召喚めし集え」

言靈を唱え終えた瞬間、墓石の下から沢山の冥鬼の死骸がミイラの如く現れてきた。

ボコッ…ボコッ…

「…！」

萩と蒼全の周りでも、冥鬼たちの死骸が墓石の下から、手など出してきた。

骨だけのものや、中にはまだ腐敗しきれてなく、血肉の付いたものもいた。

一瞬にして、その場は死骸の血なま臭さで覆われた。

「う、ッ…」

萩たちは衣で鼻元を覆つた。

むつとした空氣の中、死骸の冥鬼たちが萩と蒼全に襲い掛かってきた。

「 蒼全… つ、この冥鬼たちって…」

ザツ…ザツ

萩は槍で斬り清め、

「 たぶん、あいつ（黒天狗）に食われた冥鬼どもだろ つ」

ギャア ギャア…！

蒼全は水龍を冥鬼たちの中に放った。

萩の長槍は、言靈の力が元から宿っているため、斬つても清めることができる。

蒼全の攻撃も、式神の力で清めることができる。

「 数が多くて、このままじゃらちがあかないよー」

萩は思った。

( 食い殺した後も、自らの欲望のために支配するなんて…絶対に  
許さない )

ザツ ザツザツ…

「 だな ！！」

ギヤア グウえ、グアアア…ツ

…その時、萩は冥鬼たちに囲まれ

「 ……！」

ザツ ザツ…！

なぎ払つた。しかし

ガシッ…

「 な、ツ…」

萩は足元に目をやつた。  
するとそこは、冥鬼の墓石の所で萩の足を冥鬼がしつかりと掴んでいた。

その瞬間、片足の動きを奪われた萩の背後を、冥鬼が鋭い爪で引き裂いた。

「 つあア、ア、！…」

ビチビチッ…！

萩の叫び声が響き、辺りには血が飛び散つた。

「 萩いイイ ッ……！」

蒼全は萩の名を叫び、

「 くそッ …！」

冥鬼たちをなぎ払いながら萩のもとへと駆け寄った。

「 萩つ…大丈夫かッ！？」

すると、萩はうつすらと田を開き

「 ギリギリ…ッ なんとかね。」

裂かれる前に、一瞬だけど、薄い結界を張つたから少しあはマジ…」

うつすらと笑みを浮かべる。

「 立てるか？」

「 うん…大丈夫。…でも、早くしないと…！」

萩は立ち上がった。

( じこの状態だと戦力不足だ…。東雲を呼ぶしかない )

萩はそう思つと、心の中で叫んだ。

( 東雲ええ ツ――!――! )

ツ！・！・！・！

大

旅館の方では

( 東雲ええ ッ――――! )

！」

東雲の脳裏に萩の東雲を呼ぶ声が響いた。

「この声…萩くん！？」

その瞬間、東雲はスッ…と姿を消した。

\* \* \*

神楽山の方では萩たちが冥鬼たちに苦戦していた。  
すると

「萩くん！蒼全ツツ！！」

東雲が式神としての本来の姿で現れた。

「東雲ツー！」

萩が喜びの表情で出迎えた。

「助かる！東雲」

蒼全も萩と同じ表情で出迎えた。

「う、つ、何この臭い…それに、こんなに沢山の冥鬼…」

東雲も衣で鼻元を押さえた。

「東雲、この冥鬼たちの数を減らして…」「…了解」

東雲は冥鬼たちの群れに稻妻を落とした。

バリバリバリバリ…ツ

スツ…スウツ…

冥鬼たちは東雲の稻妻を受け、次々と姿を消していった。

\* \* \*

だいぶ時間が経った頃…

蒼全が辺りの冥鬼を祓い終わっていた。  
それに気付いた萩は

「蒼全っ！こっちは僕たちが引き受けるから、彼を早く…」  
「だが、そつちにはまだ冥鬼が…」  
「僕たちの事は大丈夫だから…早くッ」

蒼全は少し戸惑いながらも萩の言葉に頷き、黒天狗の元へと駆けていった。

「……！」

黒天狗は蒼全にかまいたちを放つた。だが、すべてを避けられてしまつた。

（何ッ、さっきより速さが増しただと！？）

蒼全は黒天狗との接近戦にもつていき、水の刃を彼の左腕に突き立てたが、

「……っ！……！」

浅い傷を負わせただけで、次の攻撃をしようとした瞬間  
黒天狗の顔が一変し、もとの黒天狗の顔となり

「助けて……」

「……！？」

助けを求める黒天狗の表情に蒼全の動きが一瞬止まった。その一瞬  
を黒天狗は見逃さなかつた。

黒天狗の顔はまた、冥鬼の『器』としての顔に戻り、黒天狗の風を  
纏つた左手が蒼全の腹部を貫通した。

「……グア、ツ……！」

ビチビチビチビチ... ツ ! !

一  
一  
一

ツ――――――――――――

腹部を貫通した蒼全の背後からは生々しくも、鮮血のついた黒天狗の手が見えており、辺りには血が飛び散っていた。

そして、黒天狗は貫通したままの蒼全の身体を無造作にも、近くの木へと投げ捨てた。

蒼全は木に身体を強く打ち付け、そのまま、ズルズルと地へと落ちていった。

7

言葉を発しない蒼全に萩が近づいたが、行く手を冥鬼たちに塞がれてしまった。

「 蒼全ッ！－蒼全ッ！－！」

「 ……」

萩が必死で呼び掛けたが、返事がない。

「 蒼全ッ…！」

東雲が、真っ青な顔で言葉を発した。

「 ふんつ…、不様だな。一瞬、<sup>ワレ</sup>我がこやつの意識を使つたのが、貴様の運の尽きだつたな。  
同情などかけおつて」

黒天狗は鮮血のついた左手を払いながら言った。

「 ……」

萩は自分の周りと東雲の周りに広い範囲の結界を張った。

「 萩くん？」

「 東雲つ！結界で冥鬼たちの動きを防ぐから蒼全の所に…この数だとあまり長くは防げない…！」

とその時、東雲は萩の後ろ姿を見て一瞬、言葉を失った。

「……！萩くんっ！…その後ろの怪我……」

萩の背中からは先程、冥鬼からの攻撃で傷口からは少し血が流れ出ていた。

「僕は蒼全までは酷くない。大丈夫だから、早く蒼全を……」

「……！」

萩の強い意志に東雲は

「……わかったよ、萩くん。でも、あまり無理をしないでね。後で応急処置するから」

そう言つと、東雲は蒼全の元へと駆け寄つていった。

ビーッ…

ビーッ…

「……っ！」

萩の結界にヒビが生じてきた。

(「このままじゃこの結界も保たない……でも、どうとかして東雲の、蒼全への応急処置まで保たせないと……）



～消えゆく子供 現代の神隠し～ 一  
刻＊＊＊＊＊

＊＊＊

木の傍らでは、東雲が蒼全に応急処置の結界を張っていた。  
傷口からは今もドクドクと血が流れ出していた。

＊＊＊

ビコビコリッ…

パリソンッ…！！

「 くつ…」

萩の結界が壊れ、中に閉じ込められていた冥鬼が次々に結界の外へ  
と出てきた。

ザツ  
…

萩は地を激しく蹴り、素早い動きで冥鬼たちの中へと駆けていった。

ザツ…ザザツ、ザツ ザツ…！

萩は辺りの冥鬼を先程より数多く斬り祓つていった。

…ザツ、ザツザツ…

ハア…ハア…ハア…ハア…

息を荒げながら、数少なくなつた冥鬼を斬り祓い続けて少し経つた時

「あア…ツ…！」

東雲の声がし、振り向いて見ると一人の周りを冥鬼たちが囲っていた。

東雲は結界を張っている間、攻撃ができない。  
萩は急いで、二人の元へと駆けていき、そして、結界を張った。

ハア ハア

「大丈夫？…萩くん」  
「うん。なんとか…。それより、蒼全の様態は」  
「大分落ち着いたよ。…でも、まだ意識が戻つてないの」  
「…どちらにしろ、これ以上、長期戦にさせる訳にはいかない。  
そろそろ、かたをつけないと…」  
「どうするの、萩くん」

「僕が黒天狗から、中身の冥鬼を引き離す」  
「引き離すって無理だよ！そんなこと。」  
「私も最初っから、この場にいたわけじゃないけど…私にだつて今、  
黒天狗と中の冥鬼が完全に統合し合っているのがわかる。そんな状  
況で助かるはずが…」  
「でも、僕は助ける。…彼は 黒天狗は、自分が知らない間に  
身体を乗っ取られてて、  
仲間を殺して…それに気付かず、敵討ちをしたって…。  
そんな中、何も知らずに祓われるなんて…。彼は（黒天狗は）生き  
たいはずだ。」

誰だって、命がある限り最後まで生きたいのがあたり前じゃないか。

「だから、僕はなにがなんでも、彼を助けだす……！」

そういうと 萩は結界内に札を張り、外へと出た。  
一瞬、萩は衣の袂になにかを入れた。

「 萩くん……」

東雲が不安でいっぱいの表情で萩を見上げた。  
萩は東雲に優しく微笑み、

「 僕は大丈夫。それに、今度はそつたやすく冥鬼は近づけない  
から

その直後、萩は黒天狗のもとへと向かった。

萩がその場を離れた後、残りの冥鬼が東雲たちの方に近寄ってきた。  
だが、次の瞬間、結界に触れた冥鬼たちが次々に清められていった。

スウ……、スウ……

「 完全なる肉体に近づいてきた。力が…力がみなぎつてくる…！  
もう、我に楯突く奴はいなくなる…」

黒天狗が興奮した様子で叫んでいた。

(「マズい……！」)

萩は焦りの表情をし、首から下げている数珠で言靈を唱え、動きを封じようとした。

「今こそ、我が肉体は……」

その時

黒天狗の動きが止まつた。

「……なに……ッ！？」

「！」

萩は言靈を唱えるのを止めた。

見ると、黒天狗の身体を風の結界がジリジリと縛りあげていた。すると

「血の臭いを追つてきてみれば……、手こすりてるようだな。緋ノ原家当主。」

「……？」

突然、青年の声が萩の後ろの辺りから聞こえた。

萩はこの声に聞き覚えがあり、声のする方へと振り返った。

少し離れた高木の上に灰色の髪に白の衣…

阿那狗羅ノ神の姿があつた。

「 阿那狗羅ノ神…！」

「 緋ノ原家当主、俺が動きを封じている間に早く…」  
「 …はいっ！」

萩は驚きあまつた声を上げた。

萩は黒天狗の方へ真っ正面から向かった。  
…そして、直前で風の結界が消えた。

「 …！」

黒天狗が真上を見ると

そこには地を蹴り、月を背後に、一瞬、宙に浮いた萩の姿があつた。

次の瞬間

萩は袂からなにかを取り出した。

それは先ほど、萩が袂に隠した四つ折りにされた紙…。

札を黒天狗の口に入れ、飲み込ませるかのように上から、口元を手で押さえ言靈を唱えた。

「：  
縛魂！！」

縛魂  
バツコン

黒天狗は苦しみ溢に満ちた声をあげた。

その途端、黒天狗の身体からスウ……と微かな光が抜け出てきた。

光が出てきたと同時に、黒天狗の身体が力なくその場に倒れよぎとした。

「！」

が、萩が即座に黒天狗のもとに行き、身体を抱き抱えた。

傍らでは

「 そんなバカな…………我と器は完全に一つになつていたというの  
に離されただと……！？」

器をなくし、光だけとなつた冥鬼が驚きあまつた様子でいた。

「よくもよくもよくも…!! 最後まで邪魔をしてくれたな、式

今度は貴様の身体を乗つ双つてやる  
!!

怒り狂つた冥鬼の光がすさまじい勢いで近づいてきた。

萩は数珠を握り、冥鬼の周りに結界を張り、動きを捕えた。  
肉体を無くした冥鬼は萩の力でも押さえる事が出来た。

そして構え、札を取り出し、言靈を唱えた。

「恨みし想いは清き想いとなり、清き心は穢れを祓いし時。汝、ナンジ安らかに眠れ…」

すると

冥鬼はスウ と消えていった。同時に他の操られていた冥鬼たちも姿を消した。

「もどが消えれば、他の冥鬼たちも消える…か」

萩は空に向かつて、手に数珠をかけ、手を合わせた。

\* \* \*

…それから、あの古の洞窟からは神隠しにあつていた村の子どもた

ちが

少し衰弱した様子で見つかった。

すぐに、東雲による手当てが行われた。

少し経つて、蒼全も意識を取り戻した。  
萩は蒼全の居る近くに、黒天狗を運び、寝かせていた。

阿郴狗羅ノ神も降りてきた。

\* \* \*

…東雲の手当てが一通り済んだ後

「 ん…んん… 」

黒天狗が目を覚ました。

最初に見た光景が、萩と阿郴狗羅ノ神の安堵の表情だった。

「 よかつた… 意識を取り戻したんだね  
「 ……ここは… 」

黒天狗が薄ら開けた瞳で尋ねてきた。

「おまえの山だ」

阿郴狗羅ノ神が一言答えた。

…その後、萩は黒天狗に神に身体を乗つ取られていた事…、自分が仲間を喰い殺した事…、すべてを隱さずに話した。

「そ、そんな…自分自身が…仲間を…くつ 嘰い殺し…て…」

黒天狗は瞳から大粒の涙を流し、動搖した面持ちでいた。

「君には知りたくない真実だらうけれど…、すべてを話させてもらひたよ」

萩が重々しい様子で言った。

「…いえ。自分に意識がなかつたとはいえ、この身体で罪を犯した事には変わりよのない」と…

黒天狗は遠くを見つめるような遠い目で言った。

「一つ聞きたいことがあるんだけど…、君はいつ、あの冥鬼と出会つたか覚えているかな」

「はい。…その時の事ならば覚えていきます。ある時

」

\* \* \*

かーじめ かじめ

かーじのなーかのとーりいーはー

いーついーつ、出 やあるー

夜明けのばーんに

つーると かーめがすーべつたー

後ろの正面 だーあれー

村の子どもたちが、いこ（神楽山）で遊んでいました。

でした。

…その中でも、円の真ん中で座っていた女の子の姿をなぜか見ていきました。その女の子は冥魂を持ち、他にも子どもたちの中には持つ

ている子がいました。

自分は「神楽村の子どもは冥魂を持っている子が多いな」と思つていました。

次の日、円の真ん中にいた女の子が一人、山に来ていました。

私は気になつて、離れた距離からですが見ていました。

女の子は低い木の、山の実を取ろうと慣れない手つきで木に登つていつたのです。

しかし途中、女の子は足を踏み外し、地へと落ちていく時に足を擦り切つてしまい、そこからは血がでていました。

女の子はその場で泣き崩れてしまい、自分はすぐ、仲間の冥鬼から以前、もらつて手に巻いていた

白い布を彼女の近くに置いていきました。

すると、女の子は泣き止み、驚いた様子で自分を見ていました。  
そして

「あなた……誰……？」

女の子が話しかけてきたのです。

「……えつ……」

自分は驚き、少しの間、彼女と見つめ合っていました。

少し経つて、私は彼女の傷口に布を巻きながら

「自分が…見えるんですか？」

と尋ねると

「うん」

自分はその時、彼女がなぜ自分の姿を見る事が出来るのかわかりませんでした。

しかし、初めて見る自分の姿に嫌がりもせず、羽に触れてきたのです。

「！」

「あなたの羽…。ふわふわして柔らかい…」

彼女は微笑んでました。

\* \* \*

…日が傾き始めた頃

「 ありがとう。鴉さん」  
「 えつと、自分は鴉じやなく、黒天狗なんです 」  
「 ? 鴉さんじやないんだ。…じゃあ、さよなら。黒天狗さん」

「

彼女は笑みを向け、後ろを振り返った。  
自分は帰ろうとする彼女に声をかけました。

「あのつ その…、自分が怖くないですか？人間じやない、  
自分を…」

すると彼女は、

「 だつて、怪我した私を助けてくれたんだもん。 正直、最初は  
驚いたけど、  
黒天狗さんは『優しい物ノ怪さん』だよ」

そういうと、彼女は村へと帰っていました。

自分は、まだ十歳ぐらいの彼女と…人間とその時、初めて話を交わしました。

\* \* \*

それから、次の日もまた次の日も彼女は自分に会いに来てくれまし

た。

話してこぬつちに自分たちは互いにいろいろな事を話しました。

\* \* \*　「」から先、一部は黒天狗の記憶にはない部分です。

：ある夜

「　よ。おいで  
？　なあに？　おばあちゃん」  
　　よ。おまえ、毎日神樂山の方へ行つているやつだね  
「　うん。行つてゐるよ  
「　山でなにをしてこる？」  
「　黒天狗さんとお話ししてゐるんだよ」  
　　、明日からは山へ行つてはいけないよ  
「　どうして、おばあちゃん」  
「　あの山は昔から、物ノ怪がつづりやつづりこじらつて言つたんだよ。  
普通の人間には見えないようだが、  
しら物ノ怪が見えるようだからね。  
物ノ怪と知り合つてはいけないんだよ」  
「　え？　だつて、黒天狗さんは怪我した私を助けてくれたん

だよ? …なのに」

「…『仇』だからだよ」

「…仇?」

「そう。おまえの父親の」

「え? 父さんは獣に殺され…」

「それは表向きだよ。村の皆には知らせていない。本当は物ノ怪に殺されたんだ」

「そんな…」

「まだ幼いおまえには早いと思つて言ひのをためらつっていたんだが…、

もう話してもいい頃合いだらうね…」

\* \* \*

…話を聞き終えた少女の瞳からは、大粒の涙が頬を伝い、心は黒い憎しみに満ちていった…

\* \* \*

…次の日

自分はいつものように、木の上で名も知らぬ彼女の来るのを待つていました。

その時の自分は、彼女と会うことなどがなによりの楽しみでした。あいかわらず、自分以外の仲間の冥鬼は人間が来るたびに姿を隠していました。

自分は皆に、

「人間はあの子はとても優しい子だよ。なんで皆、人間を嫌がるの？」

と言つと

「黒天狗…、おまえは本当の人間の姿を知らない。人間と冥鬼は姿を見合はせてはいけないんだ。今に、わかる時期が来るかもしねりないな…」

他の冥鬼たちは、普段はいつものように自分と接してくれていましたが、

彼女と会つ時だけは皆、違いました。

自分は仲間の意見を無視し、彼女に会いにいったのです。

…少し経つて

向こうから、彼女がやってきました。自分はすぐに彼女の元に飛び立とりました。

見ると、その日に限つて、彼女は他の人間の子らを連れてき、そして、

その中で一人、重々しい空氣に包まれていたのです。

私はその場を動かず、彼女が近づいてくるのを待っていました。  
すると、彼女はいつものように自分を呼びました。

「 黒天狗さーん…」

ガサツ

私は木の葉の影から姿を現しました。

「 木の葉が動いた！」

一人の子どもが驚いた様子でした。

「 物ノ怪だ…！」  
「 あそこに居んのか」  
「 何処だよ。俺には見えないよ」

子どもたちが 言い合ひ中、彼女は自分に指を差しながら

「 あそこ」  
「 あいつだ！ 俺には見える…！」

自分はその時、二つの事を知りました。

一つめは、子どもたちの中で冥鬼が見える子が冥魂を持つていると  
いう事。

二つめは、自分を憎悪の眼差しで見つめる彼女の姿 。

自分はその時、心の中で得体の知れないなにかが冷たい感じを残し、重々しく過ぎ去っていくを感じました。

「…………」

私は彼女に話し掛けよひとしました。

その時

「 物ノ怪なんて、大ッ嫌い！！！！！」

彼女は憎しみのこもつた声で叫びました。

「 !?！」

自分は言葉を失いました。

「 おまえらなんか、ここから出ていけっ！こくなくなちやえ……」

大粒の涙を流しながら、彼女はそこいらの石を自分に投げてきました。

「 あそこにいるんだな？皆、投げる！」

他の子らも、自分めがけて石を投げてきました。

自分は羽で身体を庇おうとしましたが、何個もの石が羽に…身体に当たりました。

「 つ、痛 ツ、痛い！」

ガツ  
!!

痛みを感じ、額の左側に手をやると血が流れ出していました。

\*\*\*

：子どもたちが去つて

自分は、血が流れ出ている傷口を押さえながら一人、泣いていました。

自分はあの時、なぜいきなり彼女が石を投げてきたのか分かりませんでした。

その後

仲間の冥鬼が声をかけてくれましたが、自分は一人にしてほしいと言いました。

泣きながら、自分は

（人間とは、なんて薄情で簡単になにもかもを裏切る生き物なんだ

：人間なんて…人間なんて）

…自分はそれから、人間と接する事を頑固とし拒絶しました。

\*\*\*

…一、二日経つたある夜。

自分は未だ、彼女との悲しさを心に残しながら一人、月を見ていました。  
すると

「おまえ、我と似た所があるな…」

突然、どこからか声が聞こえてきたのです。

「え？…」

「…その憎惡の籠もつた感情　　その気持ちを我が晴らしてや  
るとしたら　おまえはどうする…？」

「この気持ちを 楽に」

「 そうだ…」

「人間とのあの日々を…！ どうしたら晴らしてくれる…？」  
「ふふつ…。まずは、おまえの体を我に授げよ」

自分はその言葉に…誘いに領きました。

すると、突然と微かな光が現れ、自分の身体にスウ　っと入ってきました。

それからといふもの、自分は夜の間の記憶がありませんでした…。

（続）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4425y/>

---

蒼眼の契約

2011年11月17日21時16分発行